

〈論文〉

カナダにおける教育実践の考察¹
— Autobiographical Approach に着目して — (2)

小笠原 はるの

1. はじめに

この論文では、カナダの大学におけるナラティブ・アプローチをベースにした教育実践についてとりあげる。特に、自己と他者との関係を“Autobiographical Approach”によって明らかにしようとする試みについて考察したい。

カナダでは教師による自己省察、自伝的エスノグラフィ、生涯学習、芸術実践、回想録など、教師が自身を振り返り、あらたなナラティブ(物語)を生み出すための新しいアプローチや取り組みについて多角的な研究がなされている。その一つが“Autobiographical Approaches to Curriculum”である。直訳すれば「カリキュラムに対する自叙伝的アプローチ」となり、“Autobiographical Inquiry”という用語があてられているときもある。しかしながら、“(auto)biographical”も“curriculum”も自明の概念ではない。カリキュラム研究においては「カリキュラムについて問うとき、それはわたしたち自身を問うことにほかならない」(Grumet, 1981, p.122)とされていたり、「カリキュラムは教育課程であると同時に、学習する個人ともいえる」(Pinar, 2011)と定義されることもある。

1970年代以降のカナダでは自叙伝というジャンルが注目されるようになり、自伝や回想録、体験記が市場に溢れるようになった。教育や学習を考察するための客観的、科学的なアプローチにおいては、学ぶ主題(subject)と学ぶ主体(subject)が切り離されて考えられがちであったが、“autobiography”はそのことに対するカウンターアプローチとして着目されてきた。しかし、自己物語や私的な物語としての“autobiography”では、「わたし」に焦点を当てすぎた結果、主体との距離がなくなってしまう、分析対象になりにくいことも指摘されている。そうすると、“autobiography”で問われた問いは個人的であるがゆえに、社会的に共有されにくくなる。このことを踏まえて、カナダにおける“autobiography”の研究では、どのような問いが投げかけられているのかについてみて

いくことにする。具体的には、教育実践において「わたし」がどのように他者と関わっているのか、あるいは関わっていくべきなのか、教育における自己とは誰であり、何であるのか、「わたし」はどのようなかたちで世界に存在するのか、“autobiography”では社会性、共有性はどうみられているのか、といった教育現場のナラティブを考えるうえで、「関係性」に注目する問いについて考えてみたい。

本稿では、まず、“autobiographical approach”の基盤となっている、ナラティブ・アプローチについてその特徴と機能がいかなるものであるかについて述べる。後半では、“Autobiographical Approach to Curriculum”について、カナダの教師教育における実践例を具体的に考察し、それが教育というフィールドにおける関係性を再構築し、学びの可能性を開いていくものであることを論じていく。最後に、このような関係性の再構成を促すカナダの“autobiographical approach”を日本の臨床教育の状況に照らし合わせて考察し、“autobiographical approach”の可能性について考えてみたい。

2. 物語としての自己

ナラティブとは、語りという行為であると同時に語られた行為の産物としての物語でもある。人間は「物語る動物 (homo narrans)」であり (Fisher 1984)、時代や場所、社会を問わず、およそ人間が存在するところにはナラティブが存在するといわれている (Barthes 1975)。

近年、ナラティブの概念は、文学、心理学、社会学をはじめとする人文社会学諸分野において注目されており、人がナラティブを物語ること、ナラティブを理解することの重要性が明らかにされつつある。また、教育学の領域においてもナラティブという概念が分析方法として取り上げられるようになってきており、カナダにおける教育実践においても、人間理解と教育のあり方に関して知見を深めるうえで、ナラティブは重要な役割を担っている。

ナラティブという概念を手がかりにして世界を知る、なんらかの現象に迫るという人文社会学の方法はナラティブ・アプローチと呼ばれている (野村 2002, 2009)。人間のさまざまな行為や関係を言葉や語り、物語という視点から捉え直す作業である。物語は現実世界の理解を助ける。例えば、二十世紀前半の社会現象をみても、そこには近代化、科学化あるいはそれとは別方向のマルクス主義によって人類の幸福がもたらされるという物語、よい学校からよい会社に入れば幸せになるという物語、従属先に従うことで幸せになるという物語が存在していたように見える。しかし、二十世紀後半から社会で共有され

るような物語は崩壊し、定まった物語がない時代となっている。個人の人生の物語をプロデュースしていくことが求められる時代でもある。頼るべき物語がなく、自分の物語も見つけられないというときには、社会的孤立が起こるといふ物語も考えられる。このように物語は現実理解を促すものであり、よく知られた物語が参照されるとき、わたしたちはそれに影響されたり、制約されたりする。

ここでは、ナラティブ・アプローチにおける物語の性質をおおまかに3つに分類してみる。その3つとは、解釈的、機能的、そして実践的アプローチである。解釈的なものとしては、昔話や童話、小説や物語など、「語られたもの」に時代の精神や社会、文化などがどのように象徴的に描かれているのかを考察するものがある。文学研究はその主たるものであり、漫画やアニメ、ゲームをはじめとしたサブカルチャーも分析の対象となる。人は物語を聴いたり、読んだり、想像することを通して成長する。これまで語られてきた物語とともに生きているともいえる。このような意味において、ナラティブの内容を解釈するというアプローチが存在する。

一方、ナラティブをコミュニケーション行為の一環としてとらえる見方も存在する。自分が生きる世界だけでなく、異なる世界で生きる人々のこともナラティブを通して知り、触れることができる。対話すること、議論すること、説明すること、説得することなどあらゆる社会・言語活動において「語る」という行為がつかまとう。「語り」の行為は、社会的な場面でいったいどのような影響を及ぼし、どのような効果をうむのか、ナラティブの機能と社会における役割を問うアプローチがある。

さらに、ナラティブが、医療や教育など、それぞれの現場でどのように生かされているのか、ナラティブを活用した結果、個人や社会にどのような変化・変容が起きたのかという、ナラティブの変容過程を考察するアプローチがある。特に、ナラティブとアイデンティティの関係について考えるうえで、このアプローチは有用とされている。

そもそも人は何のために物語るのか。物語るという行為によって、何がみえてくるのか。その一つが経験の創造だといえる。経験とは、はじめから存在するのではなく、物語ることによって生まれるものである。人生においては、さまざまな出来事が起こるが、すべての出来事が経験を構成するのではなく、ある特定の出来事と別の出来事が結びついて語られることによって、それが経験として認識される。語られなかった出来事は忘れられるか、あるいはどこかで思い出されるまで、語られないままとなる。例えば、学生たちに一週間のうちで経験したことを語ってもらおうとすると、最初のうちは「特に何もなかった」という返答が多い。これは、実際に何もなかったわけではなく、それぞれの出来事がナラティブとして記憶されていない状態といえる。しかし、他者に問われるうちに、さまざまなこ

とをポツポツと語っていくと、それが経験（ナラティブ）として紡がれていくことがある。混沌としてつかみどころがない宇宙に星座が描かれ、神話が語られることによって、それまで見えていなかったものが認識できるようになるのと同様に、関連性あるものとして語られた出来事の集まりがナラティブとなる。また、経験というナラティブは、その人が誰であるかという意味、つまりアイデンティティを表すものでもある。

これらのアプローチは、かならずしもきれいに分類されるわけではなく、それぞれの性質が重なり合って、ナラティブの研究が展開されている。

3. Autobiographical approach（自叙伝的アプローチ）

カナダの教育実践研究にみられる“autobiographical approach”はナラティブ志向であり、他者との関係を結び直すアプローチとして有効であるとされている。

The power in telling and re-telling stories of our younger selves lies with the possibility for revising and reinterpreting not only the stories themselves but the lives to which they are connected. Memory work and other forms of life writing enable teacher to construct, see and hear their narrative identity, to answer the question of who they are by telling their stories to others (Chambers 1998 p.14).

ここでの“autobiographical approach”とは、語ったこと、書かれたことだけを研究対象にすることだけを意味しない。むしろ、書かれた出来事を、研究者側がナラティブとして捉え表現することを想定している。つまり、autobiographyは、ナラティブを実践する場となるのである。そこでは、語り手はナラティブの中に埋め込まれていながらナラティブを作り続ける存在となる。ナラティブを作り出すという行為においては能動的であるし、それをいったん受けとめるという状況を鑑みるうえでは受動的であるともいえる。能動的かつ受動的という二重性を帯びていることが、“autobiographical approach”の特徴であるといえよう。

What kind of subjectivity emerges in autobiography? Autobiography is a story that I tell about my experience. Self-as-agent, tells the story of self-as-place, the body-subject, its movement in the world, and in the process

constructs and reveals self-as-object, or as a reflective self-representation. As such, autobiography is two steps removed from the prereflective events enacted by the body subjected. The first step requires the reflection upon the moments already lived that leads to a conscious grasp of their meaning. The second step involves the presentation of those events and their meanings as they now appear to the story teller in terms of this relationship with his audience. Thus, autobiography barely recaptures the past or even records it. It records the present perspective of the story teller and presents the past within that structure. It employs the past to reveal the present assumptions and future intentions of the story teller, an elaborate detour that travels through once upon a time in order to reach now. Its truth is provided in its fictions (Grumet 2006 p.73).

ここで論じられているのは、語り手はナラティブのなかの登場人物として生きながら、そのナラティブを著者として書き続けるというアプローチである。この二重性がからみあいながら、物語が進んでいく。書かれている物語自体に語り手がかかわり、それをナラティブとして捉え、自身の物語へと織り込んでいく。教育実践の現場はつねに特定の具体的な、一過性である。当事者はその場に身をもってかかわり、そこでの経験を通してに何かを身をもって知る。その経験と知を少し離れた時空間から捉えるのが“autobiographical approach”である。

To write one's life is to live it twice, and the second living is both spiritual and historical, for a memoir reaches deep within the personality as it seeks its narrative form and it also grasps the life-of-the times as no political analysis can (Hampel, 1999 p.37).

自身の個人的なナラティブを書くにあたって、わたしたちはいくつかの側面を選択し、それを変化する歴史的、社会的脈絡のなかで生起させる。そのような脈絡のなかで、それまでなかった経験にあたえられた価値は、回想された出来事や語られた物語のかたちに影響を与える。Autobiography を書くということをアプローチとして捉えることは、書き手の人生の著者になりきるのではなく、自身の物語が多面的に構成されていることに気づくことである (Hampton 1995, Hasebe-Ludt, 2009, Hirsch 2008, Rossington, 2007)。

4. Curriculum Inquiry (カリキュラム研究)

カナダの大学では、“autobiographical approach”をカリキュラム研究の一環として提示していたことが特徴的である。筆者が在外研究を行っていたカナダのマギル大学の大学院セミナーの名称も“Autobiographical Approach to Curriculum”であった。このセミナーは教師教育の一環として展開されており、実際に現地の小学校から大学までの教員と発達援助職、学校長などの教育専門職 20 名程度が参加していた。セミナーはカナダのカリキュラム研究をリードしているテレサ・ストロング・ウィルソンによって行われ、講義名の示すように“autobiographical approach”と“curriculum”のかかわりについて探求するものであった。

ここでのカリキュラムとは、単なる教育課程としての意味ではなく、学校において人生と人生が出会う場としてのカリキュラム (curriculum making) である。この見方はカナダの教育学者であるクランディニンの研究にも基づいている (Clandinin, 2006)。学校というカリキュラムは関係者がともに多様な人生を模索する場であり、さまざまな物語が衝突、干渉しあうことによって人生のカリキュラムが方向づけられる。

“Autobiography”は、しばしば個人的なものであると考えられているが、セミナーでは一貫してコラボレーションによる試みとして捉えられていた (Strong-Wilson, 2012, 2015)。つまり、グループやコミュニティや社会のナラティブとしての位置付けである。個人の物語は他者の物語と重複し、集合的な物語となる。個人的な形式の autobiography であっても、それが書かれたより広い文脈からの考察を試みる必要がある (Rothberg, 2009, Sebald, 1996, Steedman, 1992)。

セミナーで取り上げた autobiographical なアプローチを研究するためのテキストは多種多様であった。フランク・マコートの“Teacher Man” (2005 邦訳なし) は、文学と教育のはざままで試行錯誤しながら日々、英語教師として生徒と向かい合う日々を赤裸々に綴った自叙伝であり、「教師という存在が、もう少し理解されようになりたい」というのがマコートの執筆目的だったという (福岡 2011 p.63)。マコートの自叙伝的小説『アンジェラの灰』は、ピューリッツァー賞を受賞し、世界でベストセラーになり、映画化もされている。マコートはアメリカで生まれ、幼いころに故郷のアイルランドに戻り、アメリカ帰りゆえの差別を受け、青年になってアメリカへ渡ると、アイリッシュだからといって差別を受け、そのなかで教育を受け、マンハッタンの学校教師となった。マコートの自叙伝と比較して読まれたのが、エドモンド・ドゥ・ヴァール著の『琥珀の眼の兎』(2010) である。これはタイトルにもある「兎」の根付けを含むコレクションがいかなる過程で著

者の手に渡ることになったのかをたどる歴史ロマンといった趣のある作品である。話題の中心は、著者個人ではなく、19世紀から20世紀にかけて興亡したある財閥一族で、この作品はイギリスでベストセラーとなった。また、キャロリン・ステードマンの“Landscape for a Good Woman: A Story of Two Lives”（1986 邦訳なし）も取り上げられた。この作品は女性で貧民という立場が社会の周縁に位置付けられていることと、母と娘、両者の体験に焦点を当て、社会学的な調査をもとに、彼女たちのたどった人生を歴史的に洗い直すという画期的な試みをしている。この他にも『不思議の国のアリス』のモデルとなった、アリス本人によるパーソナルナラティブや、『くまのプーさん』の著者ミルンの子息で同作品に登場するクリストファー・ロビン・ミルンによる回想録など、セミナーでは教育実践における **autobiography** とは一線を画すようなテーマによる作品を分析した。

それぞれが果たして、“autobiographical approach”として認められるのか、また教育実践においてなにかしらのヒントを得られるものなのか、特定の事象をさぐる上で有効なのかについては、当然ながら統一見解は出なかった。異なる書き手が異なる方法で自身や世界との関係を新しい目で見つめ直そうとしているからである。しかしながら、ナラティブを通して自己と他者の関係、世界との関係を理解し、わたしたちが世界をどのように意味づけているのかを理解する方法として、**autobiography** を書くという手段は有効であることは十分理解されていたといえる。なぜなら、書くということは、書き手自身や読み手との対話を根底にしている。内なる声は他者の多声と重なり合う。それらを統合するのではなく、それらを編みなおすのがナラティブ的な実践であるとすれば、セミナーで幅広いテーマによる **autobiography** を取り上げ、それぞれを分析し、その方法を問うことそのものが、“autobiographical approach”であるといえるからだ。

5. 教育実践としての Autobiographical Approach と今後の課題

Autobiographical approach は、ナラティブ・アプローチと同様、関係を編みなおすために有効なアプローチの一つではないだろうか。Autobiographical Approach による教育実践とは、自身が対象とする世界との認識関係を見直すこと、学生を含め、教育に関わる他者との社会的関係を見直すこと、さらに、自己との倫理的関係を見直すことといえる。教育実践において、教師と学習者は対象世界との対話をしながら、他者との対話を行い、同時に自己との対話も行なっている。Autobiographical Approach は、個人が思考する場でもあるし、また他者との対話の場でもある。さらに、自身をとりまく社会についての思考をめぐらす場であるともいえる。自己、他者、世界との関係性を見直しは、相互

に関わり合いながら、あたらしい学びの場を形成していくと思われる。Autobiographical Approach を活用して、教育実践を意識的に振り返りながら、学習者を支援することで、自身にゆらぎが生まれたり、場合によっては自身の基盤が崩されたり、また新しいナラティブが生まれるきっかけとなる。

本稿では、カナダの大学におけるナラティブ・アプローチをベースにした教育実践についてとりあげ、自己と他者との関係を“autobiographical approach”によって編み直そうとする試みについてとりあげた。今後は、実際にマギル大学で行われた autobiographical approach を活用した表現手法を紹介し、その内容と形式についての考察を行なっていきたい。日本では、教育現場でエピソードを記述し、それに対する検討会を行うという試みが盛んである。しかし、カナダでは書く対象とするフィールドは教育現場に限られてはおらず、記述や表現方法もかなり自由である。そういった記述や表現方法を具体的に示しながら、autobiographical approach によるカリキュラムを捉えたとき、どのような考察ができるだろうか。今後の課題とする。

引用文献

- Atina, N., & Davies, J. (2010). Nostalgia and the shapes of history: Editorial. *Memory Studies*, 3, 181-186.
- Barthes, R. (1975). *An introduction to the structural analysis of narrative*. *New Literary History*, 6 (2), 237-272.
- Cavarero, A. (2000). *Relating narratives: Storytelling and selfhood*. London: Routledge. (pp.1-4).
- Chambers, C. (1998). On taking my own (love) medicine: Memory work in writing and pedagogy. *Journal of Curriculum Theorizing*, 14 (4), 14-20.
- Clandinin, J.D., Huber, J., Huber, M. Murphy, M.S., Orr, A.M., Pearce M., Steeves, P. (2006). *Composing diverse identities: Narrative inquiries into the interwoven lives of children and teachers*. New York: Routledge.
- De Waal E. (2010). *The hare with amber eyes: a hidden inheritance*. New York: Picador.
- Douglas-Fairhurst, R. (2015). *The story of Alice*. Cambridge, MS: Belknap Press (HUP). (pp.1-23; 419-28).
- Fisher, W.R. (1984). Narration as a human communication paradigm: The case of public moral argument. *Communication Monographs*, 51, 1-22.
- Grumet, M. (2006). Toward a poor curriculum. In W. Pinar & M. Grumet, *Toward a poor curriculum* (pp.67-88). Troy, NY: Educator's International Press.
- Hamp, P. (1999). *I could tell you stories*. New York: W.W. Norton. (pp.21-37).
- Hampton, E. (1995). Memory comes before knowledge. *Canadian Journal of Native Education*, 21, supplement, 46-54.
- Hasebe-Ludt, E., Chambers, C., & Leggo, C. (2009). *Life writing and literary message as an ethos for our times*. New York: Peter Lang. (pp.39-44 & 151-174).

- Hirsh, M. (2008). The generation of postmemory. *Poetics Today*, 29 (1), 103-128.
- McCourt F. (2005). *Teacher man: a memoir*. New York: Scribner.
- Milne, A.A. (1926). *Winnie-the-Pooh*. Toronto: McClelland & Stewart (pp.ix-11).
- Milne, A.A. (1939). *Autobiography*. New York: E.P. Dutton. (pp.278-287).
- Milne, C. (1975). *The enchanted place*. New York: E.P. Dutton & Co. (Ch. 2, 15, Epilogue).
- Pinar, W. (2012). *What is curriculum theory?* New York: Routledge. (pp.43-52).
- Radstone, S. (2010). Nostalgia: Home-comings and departures, *Memory Studies*, 3, 187-191.
- Rossington, M., & Whitehead, A. (2007). Introduction. In M. Rossington & A. Whitehead (Eds.), *Theories of memory: A reader* (p.1). Baltimore: The John Hopkins University Press.
- Rothberg, S. (2009). *Multidirectional memory*. Stanford, CA: Stanford University Press. (pp.5-7).
- Sebald, W. G. (1996). Paul Bereyter. In W.G. Sebald, *The Emigrants*. New York: New Directions.
- Steedman, C. (1986). *Landscape for a good woman: a story of two lives*, New Jersey: Rutgers University Press.
- Steedman, C. (1992). The tidy house. In C. Steedman, *Past tenses: Essays on writing, autobiography and history* (pp.65-89). London: Rivers Oram Press.
- Strong-Wilson, T. (2012). Old narratives bread apart. In C. Chambers, E. Hasebe-Ludt, C. Leggo, & A. Sinner (Eds), *A Heart of Wisdom: Life Writing as Empathetic Inquiry* (pp.35-42). New York: Peter Lang.
- Strong-Wilson, T. (2015). Phantom traces: Exploring a hermeneutical approach to autobiography in curriculum studies. *Journal of Curriculum Studies*, 47 (5), 613-632.
- 野家啓一 (2005) 『物語の哲学』 現代岩波文庫
- 野口裕二 (2002) 『物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ』 医学書院
- 野口裕二編 (2009) 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房
- 福岡真知子 (2011) 「フランク・マコートとジェイムズ・ジョイス 文学と教育の間」 こども教育 宝仙大学紀要 2

1 本稿は平成 27 年度札幌大学校費留学研修の研究助成による成果の一部である。